

**[成果情報名] 諫早湾干拓地における施設イチゴ「さちのか」の栽培適応性と施肥体系**

**[要約]** 諫早湾干拓地における施設イチゴ「さちのか」の地床栽培では、塩害の発生はなく、総窒素施肥量20kg/10aで4,500kg/10aを確保でき、既耕地並の収量性を示す。施肥は、総窒素施肥量20kg/10aとし、うち16kg/10aを基肥として、硫安と140日タイプの緩効性肥料を窒素成分比 1:3 の比率で配合する。追肥は140日タイプの緩効性肥料（窒素成分4kg/10a）をマルチング被覆前に施用する。

**[キーワード]** 諫早湾干拓、促成イチゴ、さちのか、栽培適応性、施肥設計

**[担当]** 総合農林試験場・企画経営部・干拓科

**[連絡先]** 電話0957-35-1272

**[区分]** 総合・営農(干拓)

**[分類]** 指導

---

**[背景・ねらい]**

諫早湾干拓地の営農計画モデル類型において施設経営品目としてイチゴが示されているそこで、干拓地土壌における施設イチゴの地床栽培での生育、収量性の評価と栽培適応性について調査した。また、県施肥基準N-20kg/10aを標準とした施肥量と施肥体系について併せて検討した。

**[成果の内容・特徴]**

1. 「さちのか」が標準的な生育を示した平成18年は、12月から5月までの収穫で4,500kg/10aを確保できるレベルにあり、果実糖度は10.9前後である。塩害の発生はなく、栽培適応性は既耕地並である。(表2)

2. 県基準技術による「さちのか」の窒素施肥量 N-20.2kg/10aを標準として、N-24kg/10aと比較した結果、総収量は処理間で差はない。(図1)

3. 基肥に施肥する硫安と緩効性肥料の配合比を1:3(窒素量比)とし、基肥と追肥の窒素施肥比率を4:1とする施肥設計を標準として、緩効性肥料の混合比率、基肥と追肥の比率を変えて生育、収量を調査した結果、処理間に有意差はないものの標準区(窒素施肥量 20kg/10a、基肥16kg/10a、追肥4kg/10a)で3ヶ年の収量は安定した。(図1)

4. 急激な窒素成分の溶出や過剰な吸収が原因とされる「鶏冠果」や「先青果」等の異常果の発生は少なく、処理間にも差は認められない。

**[成果の活用面、留意点]**

1. 施肥は、窒素肥料のみとし、当面の間、加里、りん酸の施肥は行わない。  
施肥前には必ず土壌診断を行い、連作により加里、りん酸、塩基類の低下が認められる場合は不足成分の補給を目的として施肥の設計を行う。
2. 土づくり対策として、栽培終了後8月下旬までの間、夏作緑肥作物を作付けし、刈取り、細断後すき込む。
3. ほ場の条件(水溶性塩素イオン濃度が500ppm以上)によっては塩害が発生する危険もあることから事前に診断を行うと共に高い場合は除塩対策を徹底する。
4. 電照、加温等の管理は県基準技術に準ずる
5. 本情報は、諫早湾干拓営農技術対策の指針へ反映させる。

[具体的データ]

表1 施肥設計一覧

区名	基肥(N-kg/10a)			追肥 LP140	合計N	基肥:追肥	平成16年	17年	18年
	硫安	LP100	LP140						
①標準区	4.2		12	4	20.2	80% : 20%	○	○	○
②追肥増施肥区	4.2		12	8	24.2	67% : 33%		○	○
③肥効調節区	4.2	6	6	4	20.2	80% : 20%	○	○	○
④肥効調節、追肥増施肥区	4.2	6	6	8	24.2	67% : 33%		○	○
⑤追肥重点区	4.2		6	10	20.2	50% : 50%		○	○
⑥追肥重点、増施肥区	4.2		6	14	24.2	42% : 58%		○	○
⑦硫安多肥区	8.4			4	20.4	80% : 20%	○		

表2 収量及び品質(平成18年)

処理区名	総収量(kg/10a)			糖度(Brix)	
	平均	最高	最低	標準偏差	
①標準区	4,592	5,081	3,885	10.8	±1.6
②追肥増施肥区	4,474	4,909	3,934	10.9	±1.7
③肥効調節区	4,310	5,039	3,823	10.9	±1.6
④肥効調節、追肥増施肥区	4,509	4,937	3,958	10.9	±1.6
⑤追肥重点区	4,527	5,068	4,166	10.7	±1.6
⑥追肥重点、増施肥区	4,691	5,105	4,251	10.8	±1.5
有意差	n.s			n.s	

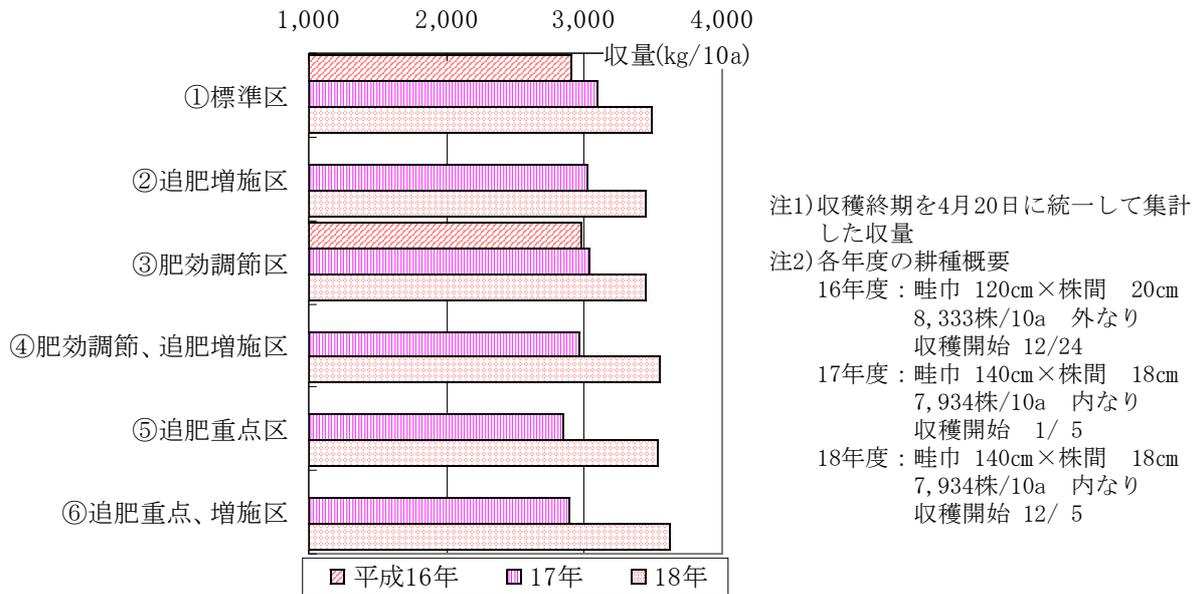


図1 施肥体系の違いと収量性

[その他]

研究課題名：2) 諫早湾干拓営農対策試験(2) 営農対策試験②施設野菜栽培法

予算区分：県単

研究期間：2004～2007年度

研究担当者：小林雅昭

既発表論文：17年度、18年度干拓営農対策試験成績書